

仏、慈氏に告げたまわく、もし衆生ありて、疑惑心をもつてもろもろの功德を修して、かの国に生まれんと願ぜん。仏智・不思議智・不可称智・大乘広智・無等無倫最上勝智を了らずして、この諸智において疑惑して信ぜず。しかもなお罪福を信じて、善本を修習して、その国に生まれんと願ぜん。このもろもろの衆生、かの宮殿に生まれて、寿五百歳、常に仏を見たとまつらず、経法を聞かず、菩薩・声聞・聖衆を見ず。このゆえにかの国土にはこれを胎生という。『真宗聖典』三二八頁)

第16組 好藏寺住職

## 「罪福を信じて、善本を修習する」(2)

両瀬 渉

text by Wataru Ryose

### 「修諸功德の願」

十九願は、「修諸功德の願」といわれます。功德とは、「現在、または未来に幸福をもたらす善い行い。神仏の果報をうけられるような善行。すぐれた果を招く力を徳としてもっている善の行為」と説明されています(『日本国語大辞典』小学館、6巻、551-552頁)。直接的な利益や打算と結びつくことは求めないが、目に見えない力であり、やっておけばやがて何らかのかたちでプラスになり、決して無駄なことではないという思い。「功德」というものに対する漠然とした信頼が、人間にはあるのだと思います。

「真宗門徒」と呼ばれる人々は、朝夕のお勤めをし、報恩講をはじめとするお寺での法座に足を運び、聞法の生活を実践してきました。「お内仏」を中心とした真宗門徒の家庭生活の伝統は、「修諸功德」の実践の後ろ姿によって受け継がれてきたと言えるのではないのでしょうか。

### 仏智疑惑

宗祖は、十九願を展開するなかで、「疑惑心をもって、もろもろの功德を修して」(『真宗聖典』、328頁)と、「仏智疑惑」ということを問題提議しています。私はまじめで勤勉な「修諸功德」の生活を実践している多くの先人達の後ろ姿

と、「仏智疑惑」ということがどう結びつくのか疑問に感じていました。

ある先輩住職から、一人のご門徒の体験を聞かせて頂き、「仏智疑惑」ということの様々な視点を与えていただきました。その方は事業経営をされており、お寺の役員として尽力され、法座にも積極的に参加する熱心な聞法者でした。高齢となり、事業は息子さんに譲った直後から、その人の生活に変化があらわれました。息子さんに譲った事業は折からの不況で業績が悪化し、倒産してしまいます。そのことが原因で息子夫婦は離婚。可愛がっていた孫も離れていきました。追い打ちをかけるように伴侶である妻が認知症を発症し、介護しなければならなくなりました。まるでヨブと同じような不幸な出来事が次々に起こったのです。住職が月命日に伺ったところ、その方が先祖代々から受け継いできた大きな立派なお内仏を、「神も仏もあるものか！」と大きな声で叫びながら、鉞でぶち壊していたのでした。

### 功德に対する信頼

「もろもろの功德を修して」というのは、自分にとって何らかのプラスの力になる、つまり自分にとっての功德ということです。そのプラスの力であるはずの功德なのに、次々と不幸な出来事が起こってしまった。そこで出てきたのが、「神も仏もあるものか！」という叫びであり、自分が積んで信頼していき「功德」に裏切られたという思いからだったのではないのでしょうか。

「教えを聞こう」という姿勢は尊いことです。しかし、教えを聞くとっても、自分の心で理解し解釈しようと努力する。その努力は、自分にとっての功德に対する信頼ということに留まっている。宗祖が「疑惑して信ぜず」と指摘していることは、「仏教を信じない」というような疑惑ではなく、如来の智慧・教えそのものが聞ける姿勢には至っていないということです。そのことを実感したご本人が後に、「今まで何を聞いてきたのだろう」と語ったそうです。

このように、人間には教えを聞く手前で、「功德」、つまり自分自身の努力に対する信頼というようなものが、根強くそして根深く立ちはだかっているのです。日常を生きるこうした「仏智疑惑」する人間を見守り続け、「念仏衆生、撰取不捨」と阿弥陀如来は願い続けてくれています。